

寝屋川市のゲンジボタル放流について

保全協会理事 杉本 博

■はじめに

闇夜に群れ飛ぶホタル。都市化の進んだ大阪ではなかなか見ることの出来ない光景だが、近郊ではまだまだホタルが生息しているのは周知の事実だ。ホタルと言えば、ついゲンジボタルをイメージしてしまう。光量が大きく、その乱舞は見る人をして桃源郷に誘わずにはおかない不思議な魅力は圧倒的であろう。他では「ヘイケボタル」がゲンジの対照として知られているものの、「ヒメボタル」「クロマドボタル」などの種もいることは一般にはあまり知られていない。その中ゲンジボタルは、人寄せの観光資源になる事に気付いた行政や観光協会などが、地域おこしの美名のもと全国のあちらこちらで移入し、在来の種に影響を与えている例が少なくない。

■寝屋川市の政策

さて、今回のレポートは寝屋川市がブランド戦略と称して、わずかにヘイケボタルの生息は確認されているもののゲンジボタルのいない寝屋川の支流である「打上川」へ上述の目的のためにゲンジボタルを放流しようとした件についての顛末である。

寝屋川市は「環境基本計画」のトップに＜メダカやホタルが生きるまちの実現をめざして＞と謳っている。一方、市のブランド確立やイメージアップ・観光をテーマとして新しい町の魅力を掘り起こすべく「ねやがわ魅力発見」を政治的戦略のひとつとしている。「ホタル飛び交う町づくり」戦略もその一環として、行政目標のひとつであるらしい。このこと自体は決して悪いことではない。一般市民にとっても町にホタルが飛び交う光景はそこに住まう者として誇りともなりうる。

■問題点

問題は、その対象が現に生息しているヘイケボタルの再生ではなく、ゲンジボタルの移入であったことだ。また、生息が確認されていない「カワニナ」を他地域から集めて放流したことだ。カワニナの放流については、外来種の巻き貝「コモチカワツボ」が紛れ込む可能性もある、さらには既存の生態系に対する影響調査も行わないままに実施したことだ。一方で、市民参画の理念でいう＜情報の共有化：情報の公開と提供＞に反して、一切が行政の独断専行で行われていたことも見過ごせない。

■寝屋川市における水生生物調査等

かつては豊かな田園が広がりを見せていた市内で、寝屋川の持つ利水効果は計り知れなかった。しかし、治水目的で護岸は矢板、底面はコンクリート貼りとなり、高度経済成長期にどぶ川と化した寝屋川は市民感情的には親しむべき存在から遊離してしまった。一級河川である「寝屋川」から市名を名付けたにも関わらずである。

河川法の改正による「環境」のキーワードを受けて、市は市民参加の「水辺ワークショップ」を

展開した。可否は別として、成果は駅前における親水空間整備となり、今回のホタル放流地の打上川の一部は多自然型河川改修（工法についての是非論はあるが。）もされるに至るなど、その後における市民協働の水生生物調査や水辺に親しむ活動に繋がって今日に至っている。河川環境部門での国土交通大臣賞を受けたのは市民として誇りでもある。

■中止運動の経過

寝屋川市内には「水辺に親しむ会」を始め、「水辺クラブ」や「寝屋川市自然を学ぶ会」など自然をフィールドとした市民レベルの活動団体がある。それら会員の一部では、伝え漏れてくる情報を得た時には声を上げて反意を示した。しかし、行政からの情報提供がない状態では事実関係が確定できず、団体内でシェア出来ないままに時間が経過した。その中、手をこまねいてはならないとの思いで保全協会として行動を起こしたのである。今回のホタル計画は自然環境保全問題や生物多様性の課題、更には生態系の維持保全に逆行する蛮行と断ぜざるを得ないとして、マスコミへのリークという手段を使いながら、市へねばり強くアクションを起こした結果、市側から話し合いのテーブルが示されたのである。

■市との交渉

◇事実関係

- ・カワニナは倉敷市から移入し、50kgを散布（放流）した。
- ・ホタル（ゲンジ）幼虫は兵庫県からと業者に聞いている。量は5万匹を予定。時期は7月中を考えている。

*両者ともに具体的な採取河川名は返答なし。また、採取地の資源枯渇についての意識は感じられない。放流の具体日については返答なし。

◇市側の問題発言と指摘

- ① 生態系に何らかの影響があるだろう事は意識している。
→*分かった上でやるのは罪が思い。
- ② ゲンジボタルがいない状況も把握している。
→*なのに、ゲンジにこだわるのか。ヘイケがいるのは周知の事実なのだからヘイケの再生に向かうのが当然だろう。
- ③ 一般市民への周知については今後の課題だと認識している。
→*市民協働と謳っているのは建前だけか。
- ④ 来年度に「ホタル飛び交う町づくり」を一挙に行うつもりはない。今は定着するか否かの試行だと考えている。
→*定着する（ある程度、死滅する前提）か否か試行するの発言は、虫の命を軽んじた人間の傲慢だと理解するべき。

■今後の方向性

今回の件は、幸いにも市当局がゲンジボタルの移入を断念するという決着を得た。決して行政を擁護するわけではないが、一旦、行政方針として始めた事業を断念することは面子上からもなかなか出来ないことだ。ひとまず今回の中止は英断であったと評価したい。しかし、既にカワニナを50kg放流した事による生態系への影響について経過観察をしていく必要がある。これは今後も継続される市民協働の水生生物調査に期待したい。また、本計画の再燃がないように行政へ対する監視の目を向けておく必要がある一方、打上川におけるヘイケボタルの再生を含め、多くの水生生物保全のためにあるべき多自然型河川改修を提言していかなければならない。

■おわりに

「自然観察会」は、ともすれば趣味の会に陥りやすい。しかし、方向さえ間違わなければ正しく自然を理解してもらえる効果はある。今回の件では、それら会員の方がいち早く問題だと着目したことでそれを証明している。(社)大阪自然環境保全協会としてこれら団体へ積極的に関わる中、趣味から保全意識への啓発をより深めることで自然保護の大きな輪が広がっていくのではないかと感じた。地域で活動する団体のほとんどは、市民を対象に自然に親しむことから活動を展開している。大仰に自然保護を謳うより「自然に目を向けて！」がスタートなのだ。筆者も「やがては、自然観察の域を出て、自然保護や生物多様性など地域の自然環境を考える講座や学習会などにつなげていきたい。」と思った。

「都市と自然」414号 2010年9月号より転載